

スポンジ革命の最先端で

—世界を夢見て紡ぐ人の輪—

7期 加々美 信光

草創期を受け継いで

昭和27年4月から30年3月までの3年間、僕は西高卓球部に在籍した。長い人生から見ると、非常に短い時間だったが、それでも僕の人生のうちで最も誇りに思える時であり、またこよなく楽しかった一時期だった。思い出は書きだすときりがない。60年以上も前の話なのに、思い出の一コマが鮮明に蘇る。この時期、西高卓球部は、「草創期」を過ぎ次の発展を目指して「助走」をはじめた時期であった。卓球界全体が激動に見舞われる中で、一人の天才が生まれ、技術面だけではなく理論面でも精神面でもわれわれの支柱となってくれた。世界を夢見て、未来を信じて、ひたすら走り続ける毎日だった。

「草創期」にあったような、卓球台をリヤカーで運ぶなどと言う事はもうなく、一応3台の卓球台が確保されていた。練習場としては体育館がほぼ毎日使うことが出来た。体育館はバスケットボール部、バレーボール部と共用だった。練習場が確保されていたことがたまたま嬉しかった。中学2年で校舎の入口の三和土で始めてラケットを握った。週に1~2度、教室の机を片隅に押しやって、ボールを打ち合うのが精一杯だった。西高に入学後、体育館での練習をみて、「やっぱり高校は違うな」と深く感銘した。とは言え、体育館の窓ガラスはいたるところで割れたままで、風の強い日などは風が入って大いに悩まされたものだった。

照明設備もなかった。確か2年の時に天井に照明がつけられたように思うが、普段は電気がつくことはなかった。冬には午後4時半ごろになると暗くなるため、練習を切り上げなくてはならなかった。校外に出て周りの畠の畝のあぜ道を駆けたり、吉祥寺の武蔵野卓球場に出むいて、練習不足を補うような事も多かった。

常連の部員は10名程度だったと思う。学年のはじめには新入生で部員数はふくれるが、学年が進むにしたがって数は徐々に少なくなった。10名の選手に対して3台の卓球台があるのだから、練習環境としては恵まれていた。試合形式の練習のウエイトは低く、ラリーの打ち合いが中心だった。1台に4人がフォアクロス、バッククロスで打ち合った。昨今のように2人で1台を占め、ボールも一時に何球も使うなどと言う事は想像もできなかった。

卓球のスタイル、戦法と言う点では、僕が入学した当時には、もう草創期の名残は数少なくなっていた。草創期の西高のスタイルは、後陣に下がって大きなドライブで打ち合うというものだったと聞いている。卓球部の創始者である中田さんという方が、大変きれいなフォームの持ち主で、この影響を受けて皆さん、非常にきれいなフォームで打たれていたと聞く。この西高の伝統的なスタイルは、僕が入学した年に卒業された4期生（昭和26年卒）までで、5期生以降になると少し変化が現れて来ていたように思う。後に述べるようにスポンジ・ラバーの登場で、卓球の中味に根本的な変革が生じはじめていたからである。それでも先輩の選手たちはスポンジラバーを使いながらも、美しいフォームは保っておられていた。僕もフォアハンド・ドライブのフォームにはそれなりにこだわった。

もう一つ、草創期の面影を残していたものがあつた。ユニフォームの色である。当時は昨今のように何枚もユニフォームを持って、次々に着替えるということとは出来なかった。1枚だけのユニフォームを毎日のように洗って着るのが普通だった。当然色は急速に褪せてしまう。オリジナルな色がどんな色だったかは知らない。僕の目に残っているのは色あせた紺色のユニフォームで、これが西高伝統のユニフォームだと先輩から教えられた。今でも僕は色あせた紺色のポロシャツを数枚持っている。妻は時々処分しようとするがこれだけは僕は許さない。何ともいえない思い出がこのユニフォームの色にはある。

「スポンジ革命」の始まり

僕が西高卓球部に在籍した時期は、世界の卓球界も大きな激動期にあつた。この歴史的な激動を一言でいうならば、「スポンジ革命」とでもいうべき事ではないかと僕は思っている。これ以前の世界の卓球界の主たる潮流はラバーでは薄いゴムに小さい粒をつけた表一枚ラバーで、戦法は日本ではペンホルダーのドライブ、欧州を中心とする世界では両面一枚表ラバーのシ

ュークハンドでカットボールの守備型の卓球であった。ピンポンという言葉に代表されるような、どちらかと言えば牧歌的な世界であったように思う。

昭和27年、インドのボンベイで開かれた世界卓球選手権大会で、突然彗星のように現れたわが国の佐藤博治選手が個人優勝を成し遂げた。当時、わが国では藤井則和選手の全盛時代で、このほかにも林忠明選手や富田芳雄選手が活躍をしていて、佐藤選手はむしろ無名に近い存在だったと思う。海外でもこれまで世界を席卷していたイギリスやヨーロッパ諸国では、佐藤選手の優勝は大きなショックであった筈だ。その証拠に同じ年の後半には、イギリスからバークマン、リーチの両選手が早速リベンジに日本を訪れ、各地で交流試合を行っている。この時には英国勢が日本サイドを完膚なきまで打ちのめした。

佐藤選手のこの降って湧いたような世界制覇は、彼がおそらく世界で最初に使い始めたスポンジ・ラバーに負うところが多かったと思う。佐藤選手はこの後、左程の成果を収める事もないまま消え去ってしまった。だが彼が世界の卓球界に革命的な大変革をもたらしたその功績は永遠に燦と光り輝いている。卓球界はその後今日まで、数多くの種類のラバーの登場をみているが、強い弾性と強烈なスピンを求めるという点では、最初に登場したスポンジの延長線にあると言える。また今日、中国の男子選手たちが見せる軽業師が格闘技を行うような卓球は、この「スポンジ革命」が行き着く究極の姿ではないかと僕は思っている。

佐藤博治選手によって幕が切って落とされた「スポンジ革命」は、次いで世界に躍り出た我々が誇る荻村伊智朗選手によって、一つの完成した姿に作り上げられた。荻村さんは昭和28年に全日本選手権を制すると、翌年には英国で開かれた世界選手権で堂々と世界一の座に着かれた。とは言っても佐藤選手や荻村選手の赫々たる戦果をみて、すべての選手がスポンジ・ラバーを取り入れた訳ではない。日本大学で荻村さんの1年後輩で、同じく1年遅れで全日本と世界を制した田中利明選手は裏ソフト・ラバーの使い手だった。田中選手は丸太棒のような腕を振り回して火の出るようなスマッシュを連発、胸のすくような卓球を見せてくれていた。また全日本の代表の常連だった専修大学の富田芳雄選手は、瘦身ながら流れるようなフットワークと華麗な流しボール、変幻自在なオールラウンドのラケットさばきで僕たちを魅了してくれたが、彼はずっと旧式一枚ラバーを使い続けていた。

この後、スポンジ・ラバーの使用が禁止されたため、スポンジだけのラバーは姿を消した。だが、この禁止措置によって「スポンジ革命」が引き起こした動きが止まった訳ではない。より強く、よりスピンのかかったボールを打つためのラバー改良競争は続き、この動きは今日、さらに激しくなっていると見えるだろう。裏ソフト、表ソフト、粒だかなど様々なラバーが登場し、さらにラバーの機能を強化するために接着剤にも様々な工夫が施されていると聞く。これに伴い卓球の中味も大きく変わった。世界選手権や全日本選手権で随処にみられる台上の奇術のようなプレー、後陣に下がっての激しいラリー、相手のスマッシュを瞬時に反撃して息の根をとめるブロックなど、僕たちには想像も出来ないプレーばかりだ。今日、一流選手同士で繰り広げられる卓球は、僕たちの世代が行っていた卓球とは、もはや異なる種類のスポーツと考えた方が良い。

「荻村伊智朗さんとの出会い」

荻村さんがいつスポンジ・ラバーに転向されたかは、僕は知らない。だが僕が西高に入学した昭和27年にはすでにこの「スポンジ革命」のリーダーとしてその最先端に立っておられた。その影響もあってか、僕が入学した時の2年生、3年生は殆どすべてがスポンジ・ラバーを使用されていた。逆にこれ以前の選手は、殆どみんな一枚ラバーの使い手であった。僕も中学時代は一枚ラバーを使っていたが、西高に入るや否や当然の如くスポンジ・ラバーに転向した。スポンジ・ラバーは比較的容易に強力なボールを打つ事を可能にしたが、一方、ボールのコントロールが難しく、特に相手の回転の変化に敏感であると言う大きな弱点を持っていた。当時、われわれの最大の課題は、このスポンジの持つ弱点を如何に克服するかであったと言って良い。

僕が西高に入学した当時、荻村さんは都立大の2年生だった。大学の卓球部には入らずに、吉祥寺の北口にあった武蔵野卓球場を拠点とする「吉祥クラブ」に所属されていた。すでに東京都の卓球界では頭角を表されつつあり、将来を期待され始められていたとは言うものの、総じて言えばまだ無名に近い選手と言って良かったのではないかと思う。だが、西高の現役部員にとってはすでに神格化された存在で、僕などにとっては雲の上の人だった。時折、西高の体育館にお見えになって練習をされる時など、僕などは遠くから見るだけであった。それでも荻村さんがボールを打たれる姿を遠くから見るだけで、何となく荻村さんの体全体のリズムが自

分に乗り移るように感じて、卓球が急にうまくなったような気がした事を覚えている。

都立大学に入学されながら、卓球部には入らず吉祥クラブで卓球を続けられるという決意をされた事情については僕は知らない。ただ、これで荻村さんがご自身の将来を卓球に賭けると決断されたのではないと思う。この後、荻村さんは都立大学を2年で中退され、日本大学芸術学部2年に転入学された。世界への雄飛を目指して、荻村さんの本格的な卓球人生が始まったと言えるのではないだろうか。

昭和27年(1952年)、僕が1年生当時、荻村さんは西高に週1~2回は練習に来られていたと記憶している。まだこの時分には僕は荻村さんにボールを打ってもらった事は殆どない。2年生の内田さんや沼口さん、3年生の若山さんや女性の斉藤さんが練習相手を務められていた。この年、荻村さんは仙台で行われた全日本軟式卓球選手権で優勝された。軟式の公式試合には大学卓球連盟に登録されている選手は出場が禁止されていたので、当時の主力選手は参加していない大会だったが、それでも日本一は日本一、決勝戦がラジオで中継されたこともあって、われわれは大いに興奮した。だが、この年の日本一を決める全日本卓球選手権には、荻村さんは残念ながら東京都の予選で敗退されると言う悲哀も味わっておられる。矢張り相手はカット系の選手だった。

それでも荻村さんの世界を目指す視線はますます確固たるものになっていった。この年の秋、前述したように英国からバグマン、リーチの両選手が来日、日本各地でわが国の一流選手を完膚なきまで打ちのめしていった。忘れもしない、当時の後樂園のアイスリンクで開かれた日英対抗戦での事だ。藤井則和、林忠明の両選手の速射砲のような相次ぐ強打を拾いまくって勝利を収めたバグマン、リーチの両選手、僕は信じられない思いで、目前で展開された妙技にうっとりとし酔い痴れるだけだった。この時、僕の前の席で「俺なら勝てる」。一球たりとも見逃すまいと大きな瞳をさらに大きくして、行き交うボールを凝視していた荻村さんの一言。荻村さんに言わせれば、「絶対にミスをしないバグマン」。この時点で、世界一のバグマンを倒す秘策がすでに荻村さんの頭の中では練られていたのかと思うと空恐ろしい。

次の年の昭和28年、若山さん、斉藤さんなどの3年生が卒業し、内田さん、沼口さんなどの2年生も受験勉強のために部活動から離れられた。一人残された感のある僕は主将に祭り上げられてしまった。幸いに新人として浜田、村田、遠藤、大久保などの諸君が入って来てくれた。この頃になると荻村さんが練習においでになる頻度も少し落ちたようにも思う。荻村さんの実力が卓球界で非常に高く評価され始めてきたこと、関東リーグの強豪、日本大学に移られ、いよいよ世界制覇を目指して多忙な毎日となったことなどがその理由ではないかと思う。

この年の春にアジア卓球選手権が、相撲協会に返還される前の両国国技館で開かれたが、荻村さんが日本代表の1人に選ばれた。この大会での荻村さんの活躍には目を見張るものがあった。個人優勝こそ、ベトナムのマイ・バンホアというバグマン、リーチクラスの超一流のカット選手に譲ったものの、団体戦では日本選手では唯一、荻村さんがこのマイ・バンホア選手を撃破した。僕も新人の浜田、村田、遠藤、久米などの諸君を誘って、授業を抜け出して両国国技館に応援に出掛けた。卓球部員の集団サボである。新人諸君はこのサボ行為が担任に見つかり、あとで大いに油を搾られたようだ。

西高卓球の変革

「スポンジ革命」の進行に伴い、西高の卓球も基本的な戦法の変革に取り組み始めた。伝統的な後陣からの大きなドライブ、すべてのボールをフォアハンドでまわり込んで打つというようなスタイルでは、もはや通用しなくなってきたからである。スポンジの威力を抑えるために、相手方もボールの回転を微妙に変化させながら前陣から速攻で攻めてくるようになってきた。

僕たち西高卓球部員が極めて幸運であったのは、この卓球界全体の歴史的な変革期に、その先覚者であった荻村さんから直接の薫陶を受ける事が出来た事である。「相手のボールをスポンジで一回掴め、そして包み込むようにして持ち上げ、そのボールをネットより高いところから相手のコートに押し込むように打て」というような指導も受けた。サービスを相手のネット際に落とし、第3球目を一気に強打する練習も重ねた。守備型の相手のバックスピンのボールを、こちらバックスピんで返球(いわゆる突っつき)し、チャンスを見て回り込んで一気に強打するなどと言う事も徹底的に練習した。また「51%戦法」と言って、決定的な強打が成功する確率が50%以上あれば、すべて思い切って強打せよとも言われた。

以上のような事は今では当たり前になっているのかも知れないが、60年前の常識では到底考えられない事であった。対戦相手の他校の選手たちもおそらくどう対応して良いか判らずに

困っただろうと思う。勿論、われわれにとっても最初からうまく行った訳ではない。だが3ヶ月、半年と研鑽を積むうちに次第にこれらの戦法が身につき、それに伴い対外試合でも結果ができるようになってきた。

荻村さんが本当に凄かったと思うのは、彼がスポンジと言う新しいラバーを単に目の勝負だけのための武器とは考えておられなかった事だろうと思う。スポンジ・ラバーの本質的な特性を徹底的に分析し、これが将来の卓球の姿を根本的に変えるものであるという洞察があった。そこから新たな戦略論、戦術論を構築に邁進された。この後、わが国は「卓球王国」として1970年代半ばまで世界に君臨する事になるが、こうした長きにわたって、世界の頂点に立ち続ける事が出来たのも、荻村さんが構築された戦略論、戦術論の裏付けがあったからだと確信する。

僕たちは、こうした荻村さんの偉業のおこぼれにあずかると言う幸運に恵まれ、見様見まねで時代を先取る卓球をしていたと言う事になる。草創期を受け継いだ僕たちの時代の西高卓球部は都内では常時、ベスト4～8ぐらいのところには位置していた。個人戦でも1～2人の選手がベスト8～16ぐらいのところまでは進出していた。屈指の進学校の常として、無茶苦茶に強い選手が新人として入ってくる訳ではなかった。そして大抵の人は2年の2学期で部活を終了するので、卓球に本気で取り組める期間は精々1年半ぐらいに過ぎない。にもかかわらず、東京都の卓球界で一応、強豪校としてその位置を保つ事が出来たのは、いま振り返ってみると、戦略、戦術面で他校に一步先んじていたからではないかと思っている。

「全日本卓球選手権ジュニアの部」

昭和28年、僕は西高2年生に進学したが、当初はこれと言った戦果は何も上がらなかった。もともと不器用な僕にとって、スポンジを使いこなす事は至難の業であった。春の憲法記念大会では、1年上の内田さんや沼口さんが部活を停止されたため、僕が新人3人をかかえて臨んだが、早々に敗退、悔しい思いをした。その後、関東高校選手権予選、全日本高校選手権（インターハイ）予選、国体予選と続いたが目ぼしい結果は出せなかった。関東選手権で内田さんと組んだダブルスで東京都の予選を通過したが、本戦では一回戦で簡単に負けてしまった。

最後の国体予選では4回戦ぐらいで城南高校の左利き裏ラバーでシェークハンドの攻撃型の選手に歯が立たなかった。回転の速い、くせ球の持ち主で僕が苦手とする左利き、加えて会場となった城北体育館の午後3時頃の採光状態は最悪だった。僕は荻村さんに向かって、少しは慰めの言葉でもと期待しながら、色々言い訳をこぼしたのだと思う。これを聞いた荻村さんの顔色が変わった。「お前は相手のボールが伸びるだの縮んだだのと言っては負ける。誰がお前に打ちやすい都合の良いボールなど打ってくれるものか！」と一喝された。荻村さん西高卓球部仲間では非常に怖い人とされていたのだが、僕が荻村さんに叱られたのはこの時だけだった。

だが荻村さんのこの一喝は応えた。この年の夏休みには必死になって練習をした。毎日のように体育館に出掛けた。1年後輩の浜田、村田、遠藤君なども頑張ってくれた。これまで試みていた事が段々出来るようになってきた。もともと後陣からの強いドライブには自信があった。加えて3球目攻撃や台上でのカットボールの応酬から回り込んで一気に強打で決めるなどという技術も大分ものになってきたように思う。今では誰でも使うが、当時は画期的なボールだった。接戦の勝負所でかなりの確率で、ショートサービスから3球目を強打出来るようになり、余裕を持ってゲームの展開をはかる事が可能になった。

秋に入ると思わぬ好機が訪れた。全日本卓球選手権ジュニアの部の東京都予選である。この大会が僕にとっては最後のチャンスであった。東京都の代表枠は6人だったと記憶する。組み合わせは6つのブロックに分けられ、僕は第1シードの都立4商の富田選手のブロックに入れられた。当時の富田選手は東京都では無敵、インターハイでも国体でも大活躍をされた選手で、彼に僕が勝つなどという事は誰一人予想出来なかったと思う。

だが、勝負はやってみなくては判らないものである。この大会、僕は極めて好調だった。特にうしろに下がってのロングのドライブで、威力のあるボールが打っていた。代表決定戦までも何人かの強敵を比較的容易に倒していた。一方、富田選手は連戦の疲れもあったのだろう、また3年生と言う事もあってか少し練習不足気味の様子だった。どこか僕などは簡単に鎧袖一触と考えられていたような節もあった。勢いに乗った僕は1セット目を圧勝、2セット目は失ったが、最後の第3セットも富田選手を圧倒し続け、思わぬ勝利と東京都代表と言う栄誉を手にした。夢のような思いだった。

この年は荻村さんも何の問題もなく東京都の代表に選ばれておられた。全日本の会場は奈良

県の天理市、天理教の総本山のあるところである。時期は10月、2学期の中間試験の直前だった。大会を前に、僕は学校の練習を終えると吉祥寺の武蔵野卓球場に出掛けて夜も練習を続けた。荻村さんも姿を見せられ、2人で夜遅くまでボールを打ち合った。当然の事のように天理には荻村さんと御一緒することになった。

昭和28年当時であって、東京を離れて天理まで全日本の大会に出掛けるという事は、今日で言えば外国に遠征する以上に大変な事であった。個人の資格での参加だから、旅費も宿泊費もすべて個人負担。だが僕は非常に幸運だった。同級生の諸君が一人50円ぐらいカンパをしてくれ、また中学校時代の仲間も別にカンパをしてくれた。お陰で我が家の負担は微々たるもので済んだが、それでも3,000~4,000円の資金を手にした。極めてリッチな気持ちに浸りながら一躍、天理に向かった。

大会初日の5日ほど前に、荻村さんと僕は天理に向けて出発した。荻村さんにとっては、この大会は優勝以外の事は考えられない大切な大会だった。「絶対に勝つ」ための周到な準備が進められ、僕はそのお相手を務めさせて貰った。鈍行(各駅停車)の夜行列車で東京を発ち、翌日昼頃に天理市に着いたように思う。まだ会場は準備されていなかったが、宿舎にあてられた天理教の巨大な宿泊施設に案内された。会場の一部を練習に使わせてもらった。天理市には天理教の様々な行事に全国から集まる大勢の信者を収容する大きな宿泊施設があり、それらがこの大会の参加選手の宿舎にあてられた。

荻村さんはこの大会で念願の初優勝を遂げられた。4回戦では苦手とする守備型・シェークハンド・カットマンの岩手大学の藤井基男選手に快勝、準決勝では五百部義平選手に大苦戦となったが何とか勝利を収められた。そして決勝戦。相手は同じ日本大学の1年後輩に当たる田中利明選手だった。これまた大接戦となったが、セットカウント3-2で荻村さんが田中選手を下し、念願の栄冠を射止められた。これまでもその実力は関係者の間では高く評価されながら、今ひとつ実績が伴わなかった荻村さんがこの優勝によって名実共に日本一の座につかれ、これ以降、長きにわたって日本の、そして世界の卓球界をリードされる事になる。この大会における荻村さんの試合を身近に観戦出来ただけではなく、事前練習の相手を務める事が出来たのは僕にとって終生忘れる事の出来ない思い出である。

ジュニアの部に出場した僕は1回戦、2回戦と相手が自分と同じスタイルの選手であった事もあって、接戦ではあったが順調に勝ち進む事が出来た。長いラリーでは僕の方が有利であったし、勝負どころでは短いサービスから3球目攻撃が功を奏したように思う。だが3回戦では青森県代表の成田静司選手に完敗した。成田選手は後に日本大学に進み、昭和32年、33年と全日本卓球選手権を2連覇したほどの実力者で、ペンホルダー・表一枚ラバーの典型的な守備型の選手だった。僕に攻撃する隙は一つもなかった。

「思い出の人々」

西高卓球部時代の3年間(昭和27年~30年)には多くの人々との出会いもあった。僕の人生にとって、最も大切な財産である。これらの出会いの思い出を通じて、この時期を振り返ってみたい。

どうしても最初は荻村さんとの出会いになる。前にも述べたように昭和28年の全日本卓球選手権前までは、荻村さんとの接点は左程強いものではなかった。だが荻村さんを遠くから眺めながらも強い影響を受けた事は間違いない。いま荻村さんを思うとき、第一に思う事はその桁はずれた国際性である。戦後、わが国が生んだ最高の国際人と言って差し支えないだろう。卓球やスポーツ界だけにとどまらず、政治、経済、社会、文化のどの分野をとっても荻村さんほどの国際人は見当たらない。

まだ無名の頃から荻村さんは、絶えず世界を念頭に置いておられた。西高に練習に来られても、二言目には僕たちにも「そんな事では世界一になれない」と叱咤激励された。無名どころか、やっとピンポンに毛の生えたぐらいの事しか出来ない僕たち初心者に対してもこの点は容赦なかった。今は残念ながら喪失してしまったが、この当時、僕たちは毎日持ち回りで「部誌」を書いていた。その中には「世界一」という言葉が氾濫していた。目の前にその事を言い続け、実現した先輩がいるのだから、単なる夢物語ではなかった。

荻村さんとの出会いは天が僕に与えてくれた最高の恵みだったが、荻村さん以外にも僕はこの3年間に、多くの素晴らしい人達との出会いを持つ事が出来た。年次順で言えば、第一に2年先輩の若山望さん(5期)。素晴らしく美しいフォームの持ち主で、当時の西高の選手には珍しく、横への動きが早く、比較的、台の近くでボールをさばける人だった。強いというよりは

高い打球点から早いボールを打っておられたが、僕たちを相手にされる時には易しいボールを打ちやすいところに打って頂いた。少しニヒルな感じがあって、今にも皮肉の一言二言が出てきそうな感じの顔つきが印象に残る。

同じく2年先輩の斉藤友希子さんとの出会いも忘れられない。僕の卓球の基礎を作った。昭和27年、1年の時の夏休み、2人で何時間も徹底的にボールを打ち合った事が昨日の事のように思い出される。斉藤さんは大学受験のご予定がなく、3年の時も部活を続けられていた。僕もほぼ毎日のように体育館に出掛けたが、いつも斉藤さんがきておられた。物凄く強い選手で、当時の僕なんか全く歯が立たなかった。厚さ1センチのスポンジ・ラバーから繰り出されるフォアハンド・ドライブは男勝りの威力があった。当時の西高では、男子のドライブ選手はすべてのボールをフォアハンドで打つと言う縛りが課せられていた。それ以前の牧歌的なロングドライブ・ラリー戦の時代の名残である。だが斉藤さんには、女性であったからか、この縛りがなかった。卓球台の中央にでんと仁王立ちされると、僕なんか攻め口が見つけれなかった。フォアハンドからは強烈なドライブ、バックハンドサイドからは目にもとまらぬブッシュで攻められ、手の打ちようがなかった。

全国高校選手権（インターハイ）の東京都代表、全日本卓球選手権ジュニアの部での東京都代表で、ともに上位に勝ち進んでおられた事からも明らかなように、すでに全日本クラスの選手であられた。卒業後、昭和30年、31年と全日本軟式選手権で2連覇されている。不幸にして、間もなく病に冒され競技生活からは引退されたが、もし元気に飛躍を続けられていたら、荻村さんに次ぐ西高出身の日本代表選手として、世界の檯舞台で大活躍をされただろうと思う。

僕のすぐ上（6期生）には内田英彦さんと沼口元彦さんのおふた方がおられた。沼口さんが190センチ近い長身瘦躯であるのに対し、内田さんは160センチそこそこの豆タンク型の体型、お二人とも井荻中学以来の親友同士でご自宅も近く、いつも一緒におられた。絵に描いたような「でこぼこコンビ」だった。登校時にうしろから眺める事が良くあったが、沼口さんが自転車をゆっくりこがれるその脇を、内田さんがいつも左腕で素振りをしてながら歩いておられた姿が目につく。

内田さんは典型的なサウスポー、厚さ5ミリ前後の固めのスポンジを使われ、台上のプレーがお得意だった。そして追えば追うほど離れていく流しボール。フォアサイドへの動きが遅い僕には大の苦手で、サウスポーに対する苦手意識を徹底的に植え付けられてしまった。そのせいかわかからないが、僕は「左」と聞いただけで勝てるような気がせず、また事実あまり勝った記憶がない。また、内田さんはダブルスの名人、1年の後半からダブルスを組ませてもらった。東京都では10戦以上戦って無敗、2年の春には一緒に関東選手権の東京都代表にも選ばれた。ただ、茨城県水戸市の茨城大学体育館で開かれた本戦では一回戦で敗退、僕が詰まらぬミスを重ねた結果で内田さんには申し訳なかった。

振り返ってみても、内田さんほど卓球が好きで好きでたまらなかった人を僕は知らない。勿論、卓球の好きな人はたくさんいる。だが内田さんの卓球の愛し方は通常のものとは全く違ったものだった。おそらく内田さんにとっては卓球が初恋の人ではなかったのだろうか。何度も卓球からはなれようとされては、卓球の魅力に抗しがたく、結局は卓球と心中されるようにして、若くして早逝されてしまった。2年生の2学期を終えたところで、部活の中止を宣言されたところまではほかの同期生と同様だった。だが、3学期になっても、3年に進学されても、授業が終わると体育館に姿を見せられる。当時、受験生は授業終了後、予備校に通われるのが通例だったし、近くに城西予備校などというのがあった。内田さんはいつも、「まだ少し時間がある、15分ほど」と言っただけでボールを打ち始められる。だが15分たっても、30分たっても1時間たってもやめる素振りはみえない。そして最後の最後まで僕たちの練習につき合っただけで終わるのが常だった。

沼口さんは、その長身から繰り出すドライブに驚異ともいえる威力を持った選手だった。特にバックサイドにぎりぎりに回り込んで、相手のフォアサイドに巻き込むように打ち込むストレートボールは超弩級で、荻村さんとも互角に打ち合える力をお持ちだった。

沼口さんは2年3学期で受験準備のため退部されたので、西高卓球部で御一緒出来たのは僅か2学期に過ぎなかったが、その後の僕の人生には大きなそして決定的な影響をもたらされた。進学を選択に当たって、沼口さんの「一橋に来いよ、俺とダブルスを組もう」というお誘いほど魅惑的な言葉はなかった。若さというものだろうか、人生の大きな選択を「一緒にダブルスが組める」という要因だけで決めてしまった。沼口さんはまた英語の達人。受験の指導も頂いた。「単語を覚えようとするな。文法は気にするな。英作文に集中しろ。Somerset Maughamは読み尽くせ」などと助言を頂き、忠実に実行した。

だが大学に入って沼口さんと組んだダブルスは期待通りとはいかなかった。4～5回御一緒したと思うがことごとく負けてしまい、間もなく解消した。ともに攻撃型の卓球を得意としたのだが、ダブルスを組むと何故か「俺が、俺が」という気持ちが先立ち、競うようにミスを重ねた。だが、人生におけるこの選択は、いま振り返ると大正解だったと確信している。好き勝手にしたい放題の事をしながら、長年海外で生活する機会を与えられ、国際業務に専心する事が出来たのは、ひとえにこの選択の結果であった。いまだに沼口先輩に金魚の糞のように付いて回り、甘えまくっている。

同じ1年上の学年に佐藤安弘さんと斉木隆さんという先輩がおられた。入学直後、おそろおそろ体育館の入口の鉄の扉を開いて中を見たとき、すぐ目に入ったのが佐藤さんと斉木さんが打ち合っている姿だった。「高等学校に入るとあんなボールが打てなくてはならないのだな」と緊張した。佐藤さんには何となく居場所が判らずにいる僕たち1年生に色々気を使って頂き、面倒を見て頂いた。斉木さんはスポンジが主流となった当時の西高卓球部で、唯一の裏ラバーの使用者で、物凄い回転とキレのあるドライブボールの持ち主だった。強い手首を活かして、ちぎっては投げ、ちぎっては投げるように打たれる強打は、一たんつぼにはいると手をつけられない威力があった。またバックハンドからのドライブサービスは強烈で、左利きの内田さんなど、絶えずノータッチを食らっていたのを覚えている。僕は1年の夏から秋にかけて、斉木さんと練習をする事が多かったが、僕の不安定なドライブボールを丁寧に返球して頂いた。僕が始めてノーミスのラリーを150回以上続ける事が出来たのは斉木さんとの練習中だった。右腕が硬直して動かせなくなったのを覚えている。これ以降、僕は自分のドライブに自信が持てるようになり、自分にとっての最強の武器にする事が出来た。

己の不徳のせい、同期で長く卓球部で活動し続けた人は今野（旧姓正田）純子さん以外に殆どいない。しかし1年後輩には非常に恵まれた。浜田泰行君、村田久君、遠藤毅君、大久保君、久米好文君など多士済々であった。この中でも特に関わりが深かったのが浜田泰行君で、僕はここで刎頸の友を得る事になる。浜田君との出会いは中学時代に遡る。天沼中学3年だった僕が松溪中学2年の浜田君と杉並区の大会で顔を合わせた。試合の内容は覚えていないが、腕前はそこそこだったように思う。何事にも動じないような風情で、如何にも度胸のありそうな顔つきをしていた。何故か彼の印象が頭から消えなかった。僕が2年に進学した時、浜田君が西高に入学した事を知った。是非卓球部に入ってくれるようにと、同じく松溪中学から入ってきた大久保君を通じて早速勧誘した。次の日浜田君が体育館に来てくれた。それ以来、彼が1999年に亡くなるまで彼との交友が続いた。

浜田君は荻村さんの指示もあり、最初からショート主戦の選手として急速に成長した。相手の強打を素早い動きでブロック、そしてカウンターアタックにつなげるバックハンドのショート、フォアサイドからのプッシュ、そして強い手首を活かした変幻自在の-spinを持つサービスが彼の武器だった。勝負強く、どんな時にも心の動きを表に出す事はなかった。相手の心理を読むのが上手で、彼の心理作戦に狐につままれたように、崩れてしまう相手も数多くいた。

試合では練習時の50～70%ぐらいしか力がでないのが普通なのに、浜田君の場合は120%近い力を出していた。だからどんな相手と当たっても勝ってくれそうな気がした。だがそんな彼も心の動揺から勝っている試合を落としてしまった事が一度ある。彼が1年生の時の新人戦決勝戦である。順調に勝ち上がり、決勝で対戦したのが当時の強豪、都立一商のエース、武井選手。第一セットは浜田君の圧勝で第二セットを迎えた。サイドが変わると正面に燦然と輝く優勝杯。これに目がくらんだのか浜田君は勝ちを焦り、タイミングを狂わせてしまい第二セットは落とす。第三セットに入って何とか頹勢を覆そうとしたが、一度狂ってしまったタイミングは如何ともしがたく、長蛇を逸してしまった。

浜田君の思い出はつきない。その中でも最も驚かされたのは、彼が僕のあとに続いて一橋大学に来てくれた事だ。もともと彼は理系の人で、数学、統計学などを得意としていた。僕は彼は東京工大でも受けるのではないかと思っていた。だから彼を一橋に誘うなどと言う事は全く頭になかった。だが試験が近づくと彼はただ一言、「加々美さん、一橋を受けるよ」。そして見事に現役合格。報告に行った担任の中野先生に「嘘でしょう」と一笑に付されたという話を、のちに彼から聞いた。彼のこの決断で、彼と僕との生涯を通じた交友が続く事になる。1年先輩の僕に絶えず厳しい事を言い続けてくれた彼。いささか自虐趣味かも知れないが、彼の厳しい言葉が僕にとっては何にも代え難い心の糧となっていた。60年少々の短い人生を早々に閉じて、沼津、千本浜の松林に囲まれ安らかに眠る彼、毎年11月には彼の墓碑を訪ねてその前で手を合わせるのが僕にとって最大の心の安らぎとなっている。

